

プラド通りとブエン・レティーロ、芸術と科学の景観

～ベラスケス・スペインの画家たちの功績～



スペインの首都マドリードには、大きなターミナル駅がふたつ、あります。主に北部方面からの列車が到着するチャマルティン駅と、バルセロナやアンダルシア地方からの列車が発着するアトーチャ駅です。日本からのツアー客の多くは、セビーリャやコルドバなどからAVE(スペインの高速列車)^{アヴェ}に乗り、アトーチャ駅に降り立ちます。駅では現地ガイドが出迎え、専用バスへのご案内します。つい4年前までは、そのままバスに乗り込むだけでしたが、今は少し違います。このアトーチャ駅の目の前にある「プラド通り」が、2021 年になんと、『プラド通りとブエン・レティーロ：芸術と科学の景観』として、世界遺産に登録されたのです。

マドリードに到着してすぐ、世界遺産のお目見えです。駅を出ると、一本のまっすぐな並木道が見えます。これが、約1 km 続く「プラド通り」です。駅正面の左手には、ピカソ、ミロ、ダリなど近現代の巨匠たちの作品を展示する「ソフィア王妃芸術センター」、さらに 500m ほど進むと、スペイン王家の宝庫「プラド美術館」、そして、通りの突き当りには、イタリアやフランスなど諸外国の名画やスペイン絵画を蒐集した「ティッセン＝ボルミネス美術館」が建っています。「マドリードの三大美術館」と呼ばれる、これら3つの美術館が、いずれもプラド通りに面しています。このプラド通りは、まさに、スペイン美術の歴史が凝縮された”世界遺産ストリート”なのです。



新緑のプラド通り

■ プラド美術館

プラド通りで最も人気が高いのは、何と言ってもプラド美術館でしょう。美術館の正面にはベラスケスの銅像が立ち、その先のベラスケス門などから入館します。その他、ゴヤ門、ムリーリョ門、ヘロニモス門と、入口が4カ所もあり、その規模の大きさが窺えます。ベラスケス像以外にも、ムリーリョ像とゴヤ像が置かれていて、スペインを代表する画家の偉大さが伝わってきます。世界有数の規模を誇る美術館でありながら、その所蔵作品の半数以上がスペイン絵画である点も、大きな特徴です。これには意味があり、ハプスブルク朝～スペイン王国～ブルボン朝など、中世から19世紀にかけてのスペイン王家の歴史を伝える作品が数多く、收藏されているためです。スペインの歴史を語る上で、欠かすことのできない美術館と言えるでしょう。また、大航海時代のハプスブルク家が支配していたフランドル地方(現在のオランダ・ベルギー)、神聖ローマ帝国(現在のドイツなど)から集められた作品も多く、ルーベンス、ブリュッセル、デューラーといった巨匠たちの名画も展示されています。



■ スペインの三大画家とは……

「スペインの三大画家」というと、皆さんは誰を思い浮かべますか。多くの方はベラスケス、ゴヤ、エル・グレコの名を挙げるかもしれませんが、確かにこれは一般的な見方のひとつですが、実はこれは見解が分かれるところでもあります。先にご紹介したプラド美術館には、スペインを代表する3人の画家の銅像が建てられています。ベラスケス、ムリーリョ、ゴヤの3人ですが、エル・グレコの銅像はありません。

これには、画家たちの生い立ちが深く関わってきます。ベラスケスとゴヤは、時代こそ異なりますが、ふたりとも生粋のスペイン人であり、宮廷画家として成功を収めた人物です。一方、ムリーリョとエル・グレコは、宮廷画家になれませんでした。ムリーリョはアンダルシア地方のセビーリャ出身で、庶民をテーマにした作品や、ラファエロを彷彿とさせる”聖母マリア”を得意とし、後半生に人気が出ました。エル・グレコはギリシャのクレタ島出身で、そもそもスペイン人ではありません。ミケランジェロ批判がもとでローマを追われ、トレドに辿り着き



ムリーリョ『ベネズエラの無原罪の御宿り』(1678年頃)
プラド美術館所蔵

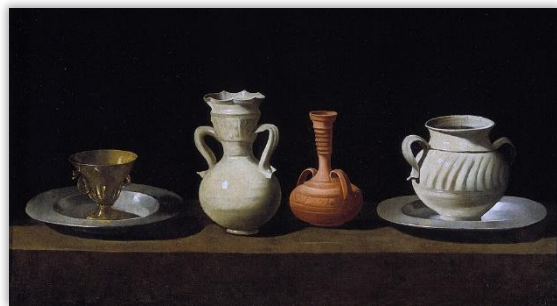


エル・グレコ『聖三位一体』
(1577～1579年頃)
プラド美術館所蔵



ゴヤ『着衣のマハ』(1805年頃) / プラド美術館所蔵

ました。トレドでは、祭壇画や宗教画でその才能を開花させます。実力と人気を兼ね備えたムリーリョと、独自のスタイルを貫いたエル・グレコ。いずれも、スペイン美術史を代表する偉大な画家です。スペイン国内では、ベラスケス、ムリーリョ、ゴヤを「三大画家」とする見方もあり、エル・グレコを加えて「四大画家」と呼ぶ人も少なくありません。それ以外に、静謐な静物画を描いたスルバランのような著名な画家も存在します。ちなみに、イタリア・ルネサンス期の 4



スルバラン『壺のある静物』
(1664 年頃) / プラド美術館所蔵

人の巨匠、ボッティチェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロは、ほぼ同時代に活躍し、互いに影響をし合う関係にありました。それに対して、エル・グレコ、ベラスケス、ムリーリョ、ゴヤの 4 人は、それぞれ活躍した時代に大きな隔たりがあります。ベラスケスとムリーリョは 19 歳差で、同じセビーリャ出身ということもあり、面識があった可能性はありますが、エル・グレコとゴヤに至っては、約 200 年の時代差があります。このように、長い時間軸にまたがる画家たちの作品が一堂に会することが、プラド美術館が、中世から 19 世紀にかけてのスペイン王家の歴史を物語る美術館であることに繋がっているのです。

主なスペインの画家 ＊16～19 世紀（年齢順）	ひと言コメント
エル・グレコ (1541 年～1614 年)	ギリシャのクレタ島出身。本名は、ドメニコス・テオトコブーロス。「エル・グレコ」とは、スペイン語で「ギリシャ人」の意味。細長くデフォルメされたキリスト像が印象的で、トレドで活躍。不遇の時代を経て、後世に再評価された。
フランシスコ・デ・スルバラン (1598 年～1664 年)	スペイン西部出身。主に宗教画や静物画を描いた。特に写実的な静物画は評価が高い。ベラスケスと親交があり、プラド美術館には彼のレリーフも残されている。
ディエゴ・ベラスケス (1599 年～1660 年)	アンダルシア地方セビーリャ出身。フェリペ 4 世の宮廷画家として活躍し、外交官としても才能を発揮。スペインを代表する巨匠だが、日本には彼の作品を所蔵する美術館がないのは意外。
バルトロメ・エステバン・ムリーリョ (1618 年～1882 年)	アンダルシア地方セビーリャ出身。庶民の暮らしや聖母マリアを題材にした温かみのある作品で、人気を博した。その実力は、同時代のベラスケスに勝るとも劣らない。
フランシスコ・デ・ゴヤ (1746 年～1828 年)	スペイン北東部出身。カルロス 4 世の宮廷画家で、ベラスケスと並ぶ「二大宮廷画家」と称される。晩年には「黒い絵」と呼ばれる独自の作品群を残し、異彩を放った。

■ 宮廷画家ベラスケス

私の思うベラスケスの作品は、「整った作品が多い」というイメージです。子供の頃から油彩画を学び、デッサンや色彩の基本をしっかりと身につけた秀才画家です。インパクトの強い作風というよりは、堅実で基本に忠実な画風が特徴です。20代の頃は、同世代の画家の中でも抜きん出た存在でした。24歳でフェリペ4世の目にとまり、宮廷画家となります。その後は宮廷画家のみならず、外交官としても活躍し、フランドル地方(現在のベルギー)の画家ルーベンスとも交流を持ちました。官僚としての仕事に追われ、絵画制作に充てる時間もままならなかった時期もありました。ベラスケスの作品の特徴は「大胆な筆致」。筆跡を残すことで力強さを表現しています。ベラスケスはイタリアでも学びましたが、その時期はルネサンス期以降、カラヴァッジョが活躍したバロックの時代でした。そのため、精細なルネサンスの画家たちの影響をあまり受けず、それがかえって、彼の独自性を高めたのかもしれません。また、この大胆な筆致は、フランスの画家マネを通じて、印象派の画家たちにも大きな影響を与えました。



『ベラスケスの自画像』

■ 代表作『ラス・メニーナス』(縦 約 320 cm×横 約 280 cm)

この作品に描かれている人物は、実際にその場でポーズを取ったものではなく、複数の人物像を組み合わせたものと考えられています。正面の少女はマルガリータ王女、その周囲に女官たちが配置され、左端の筆を持つ画家がベラスケス本人とされています。鏡の中に描かれているのは、王と王妃でしょうか。人物は合計 11 人で、犬1匹描かれています。サイズが大きく、太筆を用いた大胆な筆致が特徴的で、小筆による細かな描写は殆どありません。そのため、力強さや物質感が表現されているのです。

この作品の人物表現は卓越した技量で見事ですが、ご注目いただきたいのは、大きな部屋の「空間表現」です。この作品は、「画面を区切って観る」と、その良さが理解できます。この作品を観た第一印象として、天井が高すぎて空間が広すぎるように感じませんか。しかし、それには理由があります。画面の上半分は天井と壁、下半分に人物がぎゅっと集まった構図です。向かって左側には、高さ4~5mほどもある大きなキャンバスが描かれています。画家自身、ここまで巨大なキャンバスに描いた経験はありませんでした。もし、このキャンバスが描かれていなかったら、絵は上下に完全に分離し、作品の重心が下に偏りすぎてしまいます。ベラスケスは大きなキャンバスを描くことで、画面のバランスを保っているのです。キャンパスの木枠が、床と天井とを繋ぐ1本のラインとして重要な役割を果たし、キャンパスの



ベラスケス『ラス・メニーナス』(1656年頃) / フラド美術館所蔵

高さが重心を上方に引き上げる効果をもたらしています。また、絵の上半分を切り取ってしまうと、画面は窮屈になり、単に人物を羅列しただけの印象になってしまいます。脇役の人物も目立ちすぎて、良い構図とは言えません。さらに、奥行きもまったく感じられなくなります。天井が描かれていることで、遠近感や距離感、空気感が生まれているのです。このように、ベラスケスは画面構成や構図も熟知し、巧みに表現しています。ベラスケスは「人物描写」だけでなく、「空間」も見事に表現したのです。宮廷画家として、また、王室官僚としても、偉大な功績を残した「スペイン史上最大の画家ベラスケス」。彼の存在なくして、世界遺産登録はあり得なかった、と思います。



ベラスケス『赤いドレスを着た
マルガリータ王女』
(1660年頃) / プラド美術館所蔵

■ マドリード初の世界遺産誕生

スペイン王家にとって、15世紀から19世紀までの約400年間、画家たちは、それぞれの時代を記録するという大きな役割を担っていました。これらの作品は、スペイン王家の歴史を証明する貴重な資料なのです。

2021年に世界遺産として登録された『プラド通りとブエン・レティーロ、芸術と科学の景観』の特筆すべきところは、「景観」というキーワードに、「芸術と科学の融合」をテーマにした点です。建造物群単体ではなく、都市空間全体の文化価値に注目したのが、興味深いところです。また、登録範囲はエリアそのものであり、エリ



ア内に位置するプラド美術館などの建物自体が世界遺産に含まれていないのも、そして、これがマドリード発の世界遺産であることにも、意外性を感じさせます。世界遺産登録数で世界第5位を誇るスペインにおいて、その首都マドリードにこれまで世界遺産が1件も存在しなかったというのは、驚くべき事実ではないでしょうか。ハプスブルク家の支配、大航海時代、イスラム文化の影響、『ドン・キホーテ』、闘牛、スペイン美術……世界遺産に相応しいテーマが数多く存在するにもかかわらず、なぜこれまで登録がなかったのか、不思議に思う方も多いでしょう。他のヨーロッパの主要都市と比較してみても、ロンドンのウェストミンスター宮殿、パリのエッフェル塔、ローマのコロッセオ、ウィーンのシェーンブルン宮殿といった、誰もが知る歴史的シンボルを持つ都市に対し、マドリードには”象徴的な単体建築物”がなかったからかもしれません。しかし、それも”打ち出し方次第”だと思います。古代から中世にかけてのマドリードは、ローマやイスラムの支配下であり、16世紀の大航海時代に入って、ようやく首都となりました。歴史は約500年と長いものの、ヨーロッパの他の首都に比べると、やや浅い部類に入るかもしれません。ちなみに、「マドリード(Madrid)」の語源は、アラビア語の「マジュリード(Magerit/水源)」に由来します。このような歴史的背景の中で、「景観」という概念を切りクちに、「芸術と科学の融合」や「ヨーロッパ都市で初の並木道」といった角度から、登録の道を模索し、見事に世界遺産として認められたのです。そして、「科学と芸術」の「芸術」に注目すると、ベラスケスからゴヤといった宮廷画家から、近代のダリやミロに至るまで、スペイン美術が世界に誇れるものであったがゆえの、世界遺産誕生と言えるのではないのでしょうか。

沼田政弘